

日向国延岡藩主内藤政順夫妻を支えた藩士たち (1)

神崎直美

はじめに

本稿は日向国延岡藩（七万石・譜代）の藩主内藤政順まさよりとその夫人（充姫、繁子、後に充真院と称す）に仕えた多数の藩士のうち、特に政順が幼年時の御相手や健康管理に勤めた医師、元服や婚札に携った者、夫人に仕えた者など、主としてプライベートを支えた藩士を明らかにすることが目的である。如何なる藩士が藩主政順と夫人繁子の私的生活を支えたのか、藩主夫妻の人生の節目に注目しつつ、藩士の氏名や職名、就任年次、さらには職務の変遷などを明らかにしながら、藩主夫妻を取り巻く人間関係を検討してみたい。

検討の素材は、内藤家に仕えた藩士の事蹟をまとめた由緒書類のうち、「新由緒書」「由緒書」「下士以上由緒書」である。これらは家督相続者の現役時の履歴を家毎に提出させて編纂したもので、その対象年代は、「新由緒書」が明和九年（一七七二）二月から天保

十二年（一八四一）まで、「由緒書」は天保十三年（一八四二）から安政六年（一八五九）、「下士以上由緒書」は藩初から慶応二年（一八六六）までである。¹⁾ 家督相続者ではない者であっても、特記すべき任務についた場合は、その当時の家督相続者の履歴の箇所に、倅、もしくは養弟などというように、家督相続者との間柄を表して記録されている。

藩主の身近に仕える任務は、その任務の軽重や期間の長短の差はあっても藩士にとってたいへん名誉なことである。ゆえに、極めて一時的な任務——例えば藩主の出府・下向に際する御供——でも、各自の履歴に記載されている。由緒書類をひもとき、藩士の履歴から政順に仕えた記事を抽出すると、実に多数の藩士が様々な立場から政順の人生に関わったことがわかる。

なお、由緒書類以外に藩士の職務を知る史料として分限帳がある。当藩の分限帳は、ある特定の一年間における藩士の職務を簡潔に一覧としてまとめたものである。これに対して由緒書類は、藩士それ

それぞれの職務の変遷をその藩士の人生と共に把握することができる。分限帳は藩士の職務をいわば点として把握するのに対し、由緒書類は線として知ることができる。そこで、本稿では由緒書類を検討の素材とすることにした。

これまで、内藤政順の私生活を支えた藩士に関する詳細な検討はほとんどなされていなかった。夫人繁子については、政順が死去した後に充真院という法名を称するようになってから、天保十年(二八三九)四月に菩提寺の鎌倉光明寺へ参拝した折の随行員と、文久三年(一八六三)四月から六月にかけて江戸から延岡に転居する大旅行の際の随行員についてふれたことがあるのみである。本稿は藩主夫妻の私生活を様々な立場から支えた藩士に関する研究の試論としてまとめる次第である。

なお政順の人生の変遷に伴い由緒書類の表記も、「亀之進様」、「政順様」、「海上院殿」と書き分けている。以下の本稿では原則として政順と表記するが、藩士らが政順に関わった件を示す際には、由緒書類の表記にしたがって記載することもある。

(1) 「新由緒書」「由緒書」「下士以上由緒書」はいずれも明治大学博物館が所蔵する内藤家文書である。架号は順に第一部・三〇由緒分限の三・四・五で、巻数は十四冊、七冊、十一冊からなる。いずれも藩士の家毎にその苗字でいろは順に配列——いろは分け——している。これらの由緒書類は藩士以外にも、庶民ではあるが一時的に内藤家に仕えた者も記載されている。ここで内藤家文書の由緒書類について少しふれておきたい。当文書群の中には由緒書とみなせる史料が多数あり、

第一部・三〇由緒分限に九六点(架号の末番一〇九六)と第二部・二由緒分限に二六五点(架号の末番一〇二六五)、都合三六一点も存在する。そのなかで第一部・三〇由緒分限の一〇六が、藩初から近世後期までの時期において藩士全体の家譜をまとめた編纂物である。本稿で対象とする政順に仕えた藩士に関する履歴を記した由緒書類よりも以前の藩士を対象として編纂した由緒書類としては、藩初から元文年間(表紙には享保十七年(一七三二)六月とある)までの「由緒書」七冊(架号、第一部・三〇由緒分限の一)と、藩初から明和九年(一七七二)正月までの「古由緒書」八冊(架号、第一部・三〇由緒分限の二)、「卒族由緒書」七冊(架号、第一部・三〇由緒分限の六)がある。この「由緒書」だけは藩士の家を所属する組毎に配列——組分け——しているが、「古由緒書」と「卒族由緒書」は前述した「新由緒書」「由緒書」「下士以上由緒書」と同様にいろは分けである。六点の編纂された由緒書の体裁や記述、題名を検討したところ、組分けの「由緒書」は享保十七年をさほど離れない時期に編纂されたものであり、かつ清書した完成本であり、他の五点の由緒書とは別の編纂事業として作成されたものである。他の「古由緒書」「新由緒書」「由緒書」「下士以上由緒書」「卒族由緒書」は、安政六年をさほど離れない時期に一連の編纂事業として作成されたものであり、「古由緒書」「新由緒書」「由緒書」はその清書本で、「下士以上由緒書」「卒族由緒書」は編纂過程の下書きであり、丁の上部に編纂作業の過程で貼付した付箋も多数見られる。さらに「下士以上由緒書」「卒族由緒書」は、「古由緒書」「新由緒書」を編纂した後に、引き続き後世の編纂に備えてその後の藩士らの履歴を書き継いでいる。「下士以上由緒書」「卒族由緒書」の体裁に注目すると、家毎に記した丁の大きさもまちまちであるままにひとまとめに綴じた冊子であり、下書きであることがわかる。題名に注目すると、いろは分けの由緒書三点が対象となる藩士の活躍期が古いものから、「古由緒書」「新由緒書」「由緒書」と命名されているのは、「由緒書」という名を起点として命名し、それ以前の二点を相対的に古・新と付していることによる。なお、六

点の由緒書類のうち清書本である組分けの「由緒書」といのは分けの「古由緒書」「新由緒書」「由緒書」は、いずれも丁の上・下を切り揃え、丁の折目である版心の部分に家毎に朱の、いわばインデックスに相当するしるしを施し、さらに家名を記して検索の便を図ったり、表・裏表紙の丁を開く際に手にふれる端の部分の内側に竹を平らに裂いたものを入れて補強するなど工夫を施している。一方、下書である「下士以上由緒書」と「卒族由緒書」には、清書本に施したような工夫は見られない。「下士以上由緒書」とその清書本である三点の由緒書類に共に記載されている藩士の記述内容もほぼ同様であるが、幕末における藩士の履歴を記してある「下士以上由緒書」は清書本ではないといえ三点の由緒書類に記載された以降に活躍した藩士の履歴が記載されているので重要な史料である。なお、以下の本稿で典拠として注記する史料は、特記なき場合は全て明治大学博物館所蔵の内藤家文書である。

(2) 充真院が天保十年(一八三九)四月に光明寺参拝の旅に出かけた折の随行員については、拙稿「日向国延岡藩内藤充真院の鎌倉旅行——光明寺廟所参拝と名所めぐり——」(『城西人文研究』第三〇巻、平成二十一年)の四一〜四五頁、文久三年(一八六三)の四月から六月にかけて江戸から延岡まで大旅行をした際の随行員については、拙稿「日向国延岡藩内藤充真院の旅日記から見る関心と人物像——」(『五十三次ねむりの合の手』を素材として——(2・完)」(『城西大学経済経営紀要』第三一巻、平成二十五年)の「五 随行員と充真院との人間関係」の七〜十二頁でふれている。

一 藩主夫妻の人生の概略

藩主政順の人生について簡単にふれておこう。^① 藩主政順は寛政十

年(一七九八)二月十五日に藩主政韶の二男として江戸藩邸で誕生した。幼名を亀之進と名付けられた。父政韶は政順が五歳であった享和二年(一八〇二)七月晦日に二十七歳で亡くなった。次代藩主は政韶の養子として、政韶の前代の内藤家藩主として尾張藩徳川家から内藤家の養子に入った政脩の長子が同年十月十六日に継ぎ、政和と名乗った。政和は当時十六歳である。なお、政和の通称も亀之進である。

しかしながら、その四年後に政和が文化三年(一八〇六)十月十七日に二十歳の若さで亡くなった為、同年十二月九日に政順がわずか九歳で藩主に就任した。政順は内藤家の歴代藩主の中で、最も若年で藩主に就任したのである。政順が藩主の頃の藩政として注目すべきものとして役職の整備、江戸藩邸に学問所崇徳館を創設した^②と、有扶持制の実施、専売制の進展などが指摘されている。

職制の整備は、文化四年(一八〇七)の本厶役や相代官制、同六年(一八〇九)の勘定頭役の復活、同十年(一八一三)に普請方が本厶役兼帯となったこと、文政元年(一八一八)に船手方役所が本厶方の兼帯となり、船奉行以下が廃止されたことなどである。尤も政順は文化四年に十歳で、同六年は十二歳、同十年には十六歳であり、未だ少年の域を出ない。したがってこれらの役職の整備は、少年藩主を補佐する藩の首脳陣らが主導した策であるといえよう。

藩校の崇徳館が創設されたのは文化十二年(一八一五)で、この頃、政順は十八歳の青年藩主である。有扶持制は文政二年(一八一

九) に実施され、政順は二十二歳である。専売制は文政三年(一八二〇)に物産方役所が新設されて以来、同六年(一八二三)に紙方会所が再興され、天保五年(一八三四)四月に皮方会所が設置されておき、その間に専売品目が増えていった。専売制の進展に着手した文政三年には政順は二十三歳である。天保五年には三十七歳であり、この年の八月に没している。したがって、専売制に関する策は、政順が藩主としての見識が十分に備わった頃から進められた事業である。

政順の私的生活についてふれておこう。推定ではあるが、文化五、六年に疱瘡に罹患した^③。罹患した折、政順は十一歳、もしくは十二歳であった。当時、疱瘡は死に至り兼ねない恐ろしい伝染病である。少年藩主の罹患は、家中一同にとって沈痛な事態であったが、幸い平癒することができた。

政順は後述する婚礼決定の前後に、元服に相当する通過儀礼を行った。それは、同十一年九月二十八日の袖直し(留袖)の祝儀と、同年十二月二十八日の前髪執りの祝儀である^④。

同十一年(一八一四)八月に、譜代の名門である彦根藩主井伊直中の九子(四女)の充姫との縁組が検討され始め、同年十二月十四日にこの縁組が決定する^⑤。同十二年六月十三日に充姫が内藤家に興入れた。当時政順は十八歳、充姫は十六歳である。文政二年六月二十六日に二人の間に男子が誕生したが、わずか二日後に死去してしまった^⑥。その後、政順と側室の間に文政十三年(一八三〇)に二

人の男子、天保三年(一八三二)には二人の女子が誕生したものの、いずれも早世しており、跡継ぎに恵まれなかった^⑦。

政順は生まれつき病気がちであり、文政六、七年頃に発病して体調不良となった^⑧。しかし、天保五年八月十二日に疝気により江戸屋敷にて三十七歳で病没するまで藩主を勤めた。没後は、内藤家の菩提寺である相模国鎌倉・材木座の光明寺に埋葬された。政順の戒名は海上院殿従五位下右京兆光誉流泉明山大居士である。

政順の人生は三十七年間と短かったが、藩主としての在任期間は二十九年間であり長きにわたった^⑨。この藩主在任期間には内藤家の藩主としては政樹、忠興、政長に次ぐ長さで、政順の次に藩主となった政義と共に四番目である。尤も、政順は少年の頃に藩主に就任している、成長して政治的な見識が身につくまでの間——概ね藩主在任期間の冒頭三分の一——は藩の首脳陣らが藩政を執り行っていたのである。

内藤家と家臣らにとって、政詔および養子として迎えた政和の早世が続く、それに伴い若年藩主政順の就任が続いた時期——享和二年(一八〇二)七月から文化三年——は、度重なる藩主家の不幸により、まさしく非常事態の只中であった。少年藩主である政順が藩主として相応しい教養を修得し、人格形成を実現して見識を備えた藩主に成長することは、内藤家及び藩士たちにとって、重大な関心事であり願いでもある。とりわけ側近にとって、少年藩主の養育は、藩の将来に関わる重大な任務だったのである。

政順の夫人である繁子の人生の概略については、かつて拙稿でふれたことがあるので、本稿では繰りかえして述べることはせずに、政順と繁子の人生の概略を年表として簡潔にまとめたものを本稿の末尾に提示する(2・完)の文末)ので、これに換えたい。

- (1) 政順の人生の概略については、内藤政恒『内藤政舉伝』(続群書類完成会、昭和五十一年)十二頁・二八八頁、『宮崎県史』通史編近世上(平成十二年)一三九〜二四二頁、延岡市史編さん委員会編集『延岡市史』上巻(昭和五十八年)三七〜三八頁、以下の注記で指摘する明治大学所蔵内藤家文書に散在する史料などを基にした。
- (2) 政順が藩主の頃の藩政については、『宮崎県史』通史編近世上の二二九〜二四二頁や、延岡市史編さん委員会編集『延岡市史』上巻の四一頁に説明がある。
- (3) 政順が文化六年の年頭に痲瘡に罹ったことについては、「新由緒書」十一巻と「下士以上由緒書」十巻に側医を勤めていた喜多尚永秀喬の履歴の箇所からわかる。喜多は同年二月十五日に、政順が痲瘡を患った闘病中によく勤めを果たし、その功あって政順が死線を乗り越え治癒に至ったので、褒美として紋付の小袖を一領拝領している。二月十五日は看護に対する褒美を授与された日なので、政順が痲瘡に罹患したのは同年の一月か、もう少し遡るとすると前年の十二月頃とみなせよう。
- (4) 袖直しの祝儀に関する史料は「政順公月次御出仕御願留袖御願一件」(架号、第一部・一家・四八)、前髪執りは「御前髪御伺一件」(架号、第一部・四家・一九三)や「政順公御叙爵並前髪執御伺一件」(架号、第一部・一家・四五)である。
- (5) 政順と井伊家の充姫との婚姻については、「御縁組一件此方様合間合遣候下書並懸合向等」(架号、第一部・四家・七三)や「政順公御奥方充姫様御縁組一件」(架号、第一部・一家・四四)などに詳しい。

なお、両家の婚姻が検討されたのは文化十一年八月からであった。

- (6) 政順と充姫との子供の誕生から死去に至る過程は「政順公奥方充姫様御安産一件」(架号、第一部・四家・八三)に記されている。なお、「御鬼録」(架号、第一部・一・五三)にもこの死去した子供に関する記載がある。生没年月日の他に、その法名は「現光院殿清圓智照童子」であること、江戸の西久保にある天徳寺の攝取院に埋葬したことなどが簡潔に記されている。
- (7) 註(6)の「御鬼録」には表紙に「外書付一通」とあるが、それ以外にも紙片が二枚挟み込まれている。これらの紙片はいずれも袖裏に白い糊らしい物が付着しており、元は「御鬼録」の本体に補足として添付したものと思われる。その紙片の一枚に政順と側室との間に誕生した子供四人と政順の院号・没年・享年・死去地・埋葬地などが記載されている。なお、側室との間に生まれた四人の子供は、寅之助・鉄治郎・章姫・壽姫である。寅之助は文政十三年正月三日に江戸で誕生したが、同年七月六日に死去して天徳寺の攝取院に埋葬された。院号は心寂院殿安然常照童子である。鉄治郎は寅之助と同年の文政十三年の五月二十五日生まれで、同年十月六日に没している。埋葬地も寅之助と同様である。法名は瑞光院殿智慧照童子である。二人は同年に月違いで江戸に誕生しているので、江戸屋敷に居住している二人の側室から生まれたのである。章姫と壽姫は双子で、天保三年七月二十五日に延岡で誕生したが、章姫は同四年七月十四日に死去、壽姫は八月二十二日に死去した。二人とも埋葬地は延岡の三福寺である。法名は章姫が玉章院殿麗誓惠琳大童女、壽姫は天壽院殿睿睿瑞正大童女である。
- (8) 政順が生れながらに病気がちで、文政六、七年頃に発病したことにについては、『内藤政舉伝』の二二頁に明らかにされている。
- (9) 政順の藩主就任期間が二十九年間であることは、『宮崎県史』通史編近世上の二三九頁に指摘されている。
- (10) 政順よりも藩主在任期間が長い藩主らの期間は、政樹が三十八年間、忠興が三十六年間、政長は三十四年間である。
- (11) 繁子(後の充真院)の人生の概略については、拙稿「日向国延岡藩

内藤充真院の鎌倉旅行——光明寺廟所参拝と名所めぐり——」の三二—三四頁でふれた。なお、右の拙稿以前に繁子の人生についてふれたものとしては、明治大学博物館編『内藤家文書増補・追加目録』延岡藩主夫人内藤充真院繁子道中日記（平成十六年）の巻末に掲載されている伊能秀明「内藤家文書」と内藤充真院繁子「道中日記」について」の二六六—二六七頁がある。

二 注目すべき藩士

——今村知規家と伊藤相省家を中心に——

由緒書類を紐解くと、政順に仕えた藩士は多数存在し、それぞれが仕えた期間の長短や職務は実に様々である。本章では、政順に仕えた藩士の中から仕えた期間が長く、しかも政順の人生の重要な事項に関わり、政順からの信頼が厚かったと思われる藩士とその家族を紹介したい。

政順の人生にとりわけ深い関わりがあった藩士として、今村與一右衛門知規・今村内蔵太知郷親子、伊藤駒太郎相省、平井藤三郎徳昭を指摘しておきたい。

まず、今村與一右衛門知規についてである。知規は政順と同年代であり、政順に仕えながら成長した。当初は藩主のいわば御学友としての勤めを担い、青年になってからは表方の重職も勤めて藩政にも貢献した。政順夫人にも仕え、政順が亡くなった後に夫人が充真院と称すようになってからも仕えた。知規はまさしく藩主夫妻の人

生に寄り添った人物である。

知規は今村長左衛門秀英の三男であり、当初は安井家の養子であったが、文化六年（一八〇九）十二月十四日に同族である今村内蔵太知郷に跡継ぎがいなかった為、その養子となり知郷家を継いでいる。幼名を鑑六郎と称していたが、文政三年（一八二〇）七月九日に平馬と改名して、同八年（一八二五）十月二十八日に家督を相続し、知行二〇〇石を継いだ。

知規は鑑六郎と称していた頃から、当時、亀之進と称していた、後の政順に仕えた。鑑六郎は亀之進と同世代であったからこそ、少年藩士の遊び相手として抜擢されたのである。鑑六郎の初めての勤めは、亀之進が江戸に初めて出府する際の御相手として延岡から江戸屋敷まで御供をすることであり、任命された時期は文化三年（一八〇六）九月である。延岡から江戸までは、海路と陸路による長旅である。仮に、途中で内藤家の大坂屋敷に滞在することがあったとしても、長期間の旅は子供の身にとって体力的に大きな負担がかかったはずである。この亀之進の初めての長旅に鑑六郎も同行したのである。鑑六郎は藩主亀之進との折り合いが良かったようで、御相手として馴染んだことが認められて、同年十一月十六日に当分江戸に留まるよう命じられた。すなわち、引き続き藩主亀之進の御相手を勤めるのである。鑑六郎が知郷家の養子となった文化六年十二月の履歴の箇所にも、当時、鑑六郎が亀之進の御相手を勤めており、引き続きこの勤めを続けるという旨の記述がある。

文化十四年七月六日に鑑六郎は給人を免じられたが、延岡に向けて出発するまでの間は政順のお供をして、これまでの様に小姓を勤めた。同年八月十六日に延岡に居住していた実父に対面する願いを出して許可されて、延岡に移ったが、同年十一月一日に御稽古御相手として雇われることとなり、同月二十八日には御相手として延岡に逗留中に二人扶持を与えられた。文政元年(一八一八)四月十三日には政順の帰府に伴い、御駕籠脇に任命され道中御供を勤めた。同二年(一八一九)六月十八日に給人を免じられ、同三年(一八二〇)六月二十三日には御取次見習、同六年(一八二三)正月六日に御番所御者頭代を任命され、二月一日まで勤めた。同八年十一月三日に御家中の文武稽古の世話を命じられており、学問と武術共に優秀な人物であったことが窺がわれる。天保三年閏十一月二十五日に御用職となり、かつての父と同様に表方の重役となる。ここで藩主家の仕事からは離れ、藩政の表舞台に関わるようになる。しかし同四年十一月四日から四谷・本所の奥様御用掛、次いで同五年三月十八日には奥様御用掛——すなわち藩主夫人の繁子、後の充真院の御用掛——を命じられ、再び藩主の家族に使える奥向の仕事も命じられていた。

その後、政順の容態が悪化して再起が望めない状態になると、知規は同年八月十日から急養子を迎える件——知規の由緒書の記載によると、「急御養子様御取組御跡目御願御用諸事取調掛合」——に奔走する。内藤家の存続に関わる一大事であるからこそ、御用職でも

あり、政順の幼なじみで長年の知己であり、かつ当時、繁子に任じていた知規が任命されたのであろう。知規は御用職という藩の重職の一人という立場に加えて、長年政順のプライベートを支え続けていたので、この任務は並々ならぬ思いがあったはずである。しかも、この際の急養子は政順夫人繁子の実家である井伊家から跡継ぎを迎えることとなり、井伊直弼と直恭の二人が候補であった。少年の頃から政順の遊び相手として抜擢され、藩主夫妻と近い間柄であった知規にとって、避けられぬ政順の死を目前として次代を継ぐ急養子を迎える勤めを果たす間、如何なる心持ちでいたのかその心中を察すると、その悲しみは言葉で紡ぎきれない感がある。

政順が死去した直後の同年八月二十三日に、知規は葬送御用掛と鎌倉御供、さらに法事中における充真院様御代香を命じられ、葬儀を担い、光明寺への供、さらに充真院の代理として焼香するなど、政順の葬儀を執行する要としての役割を勤めた。政順に長年献身した功により、同年九月十五日に政順の形見分けとして紋付龍門単物や袴などを拝領した。さらに、同年十一月十二日には急養子として次代藩主政義への家督相続が滞りなく成されたことを褒章された。

なお、知規は同八年(一八三七)十月十八日に充真院が六本木屋敷に転居してからも、御用掛を引き続き勤め、弘化二年(一八四五)二月十五日には、先月の二十四日に六本木屋敷近隣で火事が発生した際に、抜群の働きをした功により褒章されている。

知規の養父である今村内蔵太知郷も政順の身近に仕えた藩士で

ある。²⁾ 知郷は文化六年十一月二十三日に御系譜編纂の為の取調御用掛、すなわち編纂員を勤めた。同八年十月十四日に御用職と御留守居役に任命されるなど、当初は表方の重役を勤めている。同十年(一八二三)十二月十七日に芳林院の葬送御用掛を勤めたことが、藩主家の家人に対する勤めである。政順に関する勤めは、同十一年(一八二四)七月九日に殿様御目見御用掛——政順が十七歳の頃、当時の將軍徳川家斉への謁見する為の勤め——を拝命した事に始まる。さらに同年十二月一日に御婚礼御用取調掛となり、政順と井伊家の充姫の婚礼を担当する。同十三年(一八一六)九月二十八日に藩主夫人繁子の御用掛、さらに文政二年(一八一九)四月二十二日には奥様御産御用掛を命じられ、その勤めが暫く続く(詳細は後述)。文政四年(一八二二)正月二十五日に藩主政順の御側掛を拝命し、同年六月十五日に政順が延岡に向する際に御供を命じられる。同六年(一八二三)四月五日にはさらに出世して御年寄役となり、御側掛、奥様御用掛も兼任した。同年十月一日には政順が病気の折に昼夜にわたり献身的に看病に尽くした功により、紋付を与えられた。同七年(一八二四)六月六日にも政順が病氣の際に尽くした事により紋付を与えられている。

病氣がちの藩主に尽くした知郷であったが、本人も病氣がちとなり、同年九月二十一日に退役と隠居を願い出て、その旨が認められた。同八年(一八二五)正月二十三日には政順の側勤めを免じられ、長年の勤務と献身を称えられて、紋付と縮緬の綿入羽織を拝領した。

政順の將軍御目見をはじめ、婚礼、子供の誕生、御側掛など、政順の人生の重要な節目に身近に仕えて貢献したのである。知郷は藩政の表舞台で活躍すると共に、藩主夫妻の私生活にも貢献したのである。知郷が藩主の御側役として仕えた当時、政順は二十四歳であった。藩主としての見識も備わったといえる年代に知郷は側近として仕えたのである。しかもその後、知郷は藩政における重役の一つである御年寄役も兼任しており、表方の重役を担いながら、奥向についても共に重要な役を勤めたのである。知郷の病氣による引退の為、その期間こそ短かったが、知郷は政順の公私共に尽くしたのである。政順に全幅の信頼を得ていたからこそといえよう。

次に、政順の人生をほぼ見つけたといえる藩士として伊藤駒太郎相省をあげておこう。³⁾ 相省は政順の前の藩主である政和の御側勤もした人物である。それは享和二年十月十八日からであり、政和が亡くなってから、引き続き新しい殿様である政順の御側勤も勤めることとなったのである。

相省が初めて政順に仕えたのは、文化三年十二月十一日であり、政順が藩主となった直後に御側勤めを命じられた。すなわち、実質は少年藩主の養育係といつてよからう。藩主就任の二日後に御側勤めを拝命していることから、相省は政順に藩主としてふさわしい人物に成長させる為の教育・人格形成を施す任務だったものと推測できる。同五年閏六月十六日には御櫛役も命じられ、御側勤と兼帯している。同九年三月十五日に礼方に励んだことにより、稽古料に加

えて手当を宛がわれることとなった。諸礼に関して相省は貢献していたのである。なお、この記述から相省が儀礼に関する知識を有する人物であることが窺がわれる。

同十一年(一八一四)四月十二日に御納戸役に任命され、御側勤から離れるが、直ぐに政順の成長に伴う通過儀礼に際して活躍することとなる。相省は政順の通過儀礼の度に御用掛を勤めている。政順が十七歳になった同年九月二十八日に袖直しの祝儀、同年十二月二十八日には前髪執りの際の御用掛を任命された。さらに、政順が井伊直中の姫君である充姫と婚礼をあげることが決定すると、同年十二月十六日に御規式仕立御用掛を拜命している。相省は政順の人生の節目である成人・婚礼など、重要な儀式の係りとして貢献したのである。しかも相省は極めて忠義者であった。同十三年閏八月三日に、当藩がとりわけ財政難に際して儉約をしていた折に、礼方に関する手当金三両を返上する旨、申し出ている。

同年九月二十八日に奥御用懸として政順夫人に任せ、その際に善姫の御用懸も兼帯する。なお、この時から奥向の重役は御里附重役一人とするよう改正され、御里附重役の西脇弥平と相談して暮向御規定を検討した。井伊家から内藤家に派遣されている御里附重役との協議は重要であり、かつ気苦労も伴う仕事であったものと思われる。なお、この奥向の勤めは同十四年三月二十五日まで勤めた。

文政元年十二月二十五日に御納戸頭となり、同二年三月二日から延岡に移り本厩方役所に勤める。以後は政順夫妻への私的な面へ

の勤務から離れる。同四年四月十六日に御納戸役頭取を免じられ、同年八月四日から自らの願いが叶って御番勤となり、同六年七月十八日から御武具方役を勤め御吟味役格となる。同六年十一月二十一日から日光御勤番御用取調御勤定頭を兼帯し、政順の日光御用の為の準備を勤める。同年十二月二十五日には御作事奉行、日光御勤番の御用掛合と御用賄役も兼帯する。御作事奉行は同八年正月二十八日まで勤めた。同九年九月二十日に御家中礼節稽古取扱を命じられ、同十二年には御番所の御鍵番を勤める。天保二年六月二十一日には再度、御作事奉行となり、御鍵番も従来通り勤めた。同三年六月十三日には西丸大手御門番を命じられている。

しかしその後、政順が死去すると、その翌日である天保五年八月二十二日には鎌倉御用——すなわち菩提寺の光明寺への御用——として、神奈川にある浄土宗の慶雲寺に使者として派遣され、同年九月二十六日には光明寺に宝塔御用——墓石である宝篋印塔の建立の為の御用——、さらに同年十二月十四日には完成した政順の宝篋印塔を検分する為に光明寺に派遣された。同六年(一八三五)五月五日には政順の宝篋印塔の前に設置した燈籠を検分する為に、また光明寺に派遣された。政順の死後もその墓石の建立と墓所の整備までも実際に見届ける役目を相省は担ったのである。

相省は、幼くして実父に死に別れた政順の成長を見守りながら仕え、成人と婚礼も身近で見届けた。その後は政順の私的な面から離れた勤めを担い、政順の死後に供養に関わる仕事を勤めた。相省は、

政順の短い三十七年の生涯のうち、その少年期・青年期に関わり、さらには死後までも関わった人物であった。政順が少年から青年、そして成人へと成長してゆく過程を目のあたりにしていた相省にとつて、藩主の死後の供養に関する任務は、任務としてだけでは割り切れないものであり、様々な思いが去来したことであろう。

なお相省は、次代の藩主政義への勤めも短期間ながら関わっている。天保五年十二月五日には、新たな藩主として井伊家から内藤家に養子に入った政義——政順の正妻充姫、後の充真院の異母弟——の前髪執りの祝儀に関わり、その後、同九年五月七日には政義が婚禮する際に御規式仕立御用掛となり、二代の藩主の婚禮の御規式仕立御用掛を勤めたのである。相省は弘化二年二月二十三日に病死しており、その前年六月二十六日に御番所御者頭代となり、死去するまで長きに亘り現役として勤めていた。家督相続が寛政三年八月十四日、藩士としての勤務は同十年四月十七日御番勤から始めた。四十七年間にも及ぶ長い勤めであった。

ところで相省の家は、その父である為七資相と息子の雄介相門、孫の金太郎相正も藩主の身近に仕えていた。^④

相省の父である資相は藩主政陽——政順の祖父——の御側勤を明和七年（一七七〇）五月十七日に命じられ、その際に御櫛方も心掛けることになった。政陽は同年十月二十九日に三十二歳の若さで藩主の座を養子の政脩に譲ったので、資相は藩主政陽が藩主を退く直前の六ヶ月程の間に身近に仕えていたのである。^⑤ 政陽の次代藩主政

脩の頃、資相は同九年（一七七二）六月十三日に御櫛方本役を命じられている。

相省の息子である雄介相門は、初めは定太郎と称し、天保二年（一八三一）四月二十三日に父が側仕えをしていた藩主政順の側本役を命じられ、政順の死後の供養にも従事した。その後、同十二年六月二十一日に藩主政義の御側見習を命じられている。さらにその後、靈社や宮付き、婚禮、充真院の重役など、藩主家の私的な面に関する仕事を担当した。

孫の金太郎相正は元治元年（一八六四）に小姓を勤めた他、慶応元年（一八六五）四月十七日に充真院が出府する際に小姓を命じられて同行している。この伊藤相省家は代々表向きの仕事を勤めることは無く、常に藩主およびその家族に仕えたのである。

次に、平井藤三郎徳昭についてふれておこう。^⑥ 徳昭は政順が藩主となった八ヵ月後から政順に仕える。少年藩主の身近な世話、さらには政順が成人となった際の学問世話役を勤め、政順の人格形成に関わった人物の一人といえる。しかも、政順が死去する迄、常に身近な勤めを命じられており、政順の人生に寄り添った藩士でもある。

その勤めは当初は短期間の勤務として始まる。御側御雇を三度命じられ、初回は文化四年八月八日から同月十一日まで、二回目は同月二十五日から同年九月十七日まで、三度目は同五年三月十七日から同月二十五日まで勤める。その後、同九年十一月十日から御櫛役を命じられ、それと兼帯として御側勤も命じられる。御側勤は同十

一年十月十九日まで続く。文政元年十二月二十五日には御近習役となり、同四年四月二十八日から御取次役、同年八月十六日から学問世話役となる。なお、政順が死去した後、天保五年九月九日に御伽を免じられている。

徳昭は側勤を長く勤めたことから、政順にたいへん気に入られていたと思われる。それ故、徳昭の息子である八兵衛も後に政順の側勤の一員に加わった(次稿に詳述)のであろう⁷⁾。なお、徳昭は政順が死去した後も藩主家の奥向の職務を勤めている。

(1) 今村與一右衛門知規については、「新由緒書」一卷と「下士以上由緒書」一卷に記録がある。なお、知規が鑑六郎・平馬と称していた頃の勤めについては、実父今村長左衛門秀英の履歴の箇所に記述がある。知規自身の履歴の箇所は、家督を相続した文政八年十月二十八日以降についてである。

(2) 今村内蔵太知郷については「新由緒書」一卷と「下士以上由緒書」一卷に記載がある。

(3) 伊藤駒太郎相省については「新由緒書」一卷と「下士以上由緒書」一卷に記載がある。

(4) 伊藤為七資相と雄介相門、金太郎相正については「下士以上由緒書」一卷に記載がある。なお、雄介相門の勤務については、家督を相続してから様子は本人の履歴の箇所に記してあるが、相続以前の勤務については父相省の箇所に記されている。

(5) 明和七年は閏六月があるので、資相が政陽の側勤をした期間が六ヶ月なのである。

(6) 平井藤三郎徳昭については「新由緒書」十二巻と「下士以上由緒書」十一巻に記載がある。

(7) この時期の八兵衛の職務については平井藤三郎徳昭の箇所に記載がある。なお、八兵衛は後に藤三郎妙徳と称する。

三 政順の幼・少年期に関わった藩士

本章以降では、前章でふれた以外の藩士について、政順の人生を軸として四期に分けて概観してみたい。四期とは、政順の幼・少年期、青年期、晩年期、死去後である。それぞれの時期にどのような藩士が如何なる立場で関わったのかを明らかにしてみたい。具体的には、幼・少年期は誕生した寛政十年から文化十年まで(一歳から十六歳まで)、青年期は文化十一年から文政六年(十七歳から二十六歳)、晩年期は体調を崩した文政七年から天保五年頃まで(二十七歳から死去する三十七歳まで)、死去後は政順夫人が充真院と改名してから由緒書類の記述の最後である慶応二年(一八六六)までである。この時期は充真院に関わった藩士についてであり、充真院が三十六歳から六十七歳までの期間が対象である。

なお、藩士によって政順に関する勤めの期間や回数は様々であり、政順の人生を幼・少年期、青年期、晩年期、死去後に大別した際に、複数に関与する場合もあるので、本稿では各自の勤めを概観したうえで、特に政順に対する勤めにおいて重要な時期の箇所に配して詳しく説明する。

まず、政順の幼・少年期——成人以前——に関わった藩士について見てみよう。まず、幼年期に関わった藩士として松本治左衛門常永をあげておこう。

松本治左衛門常永は、政順が誕生した当日から御用を勤めることとなった。寛政十年二月十五日に若殿様、すなわち生まれたばかりの赤子である後の政順への御用を命じられた。そして、若殿様が御長屋に移ってから後も、引き続きその御用を勤めたという^①。

次に幼少年期の政順の健康管理に貢献した医師を見てみよう。幼児の生存率が現在よりも低い当時において、幼い藩主を健やかに養育して成人に至らせることは大名家にとって重要なことであり、それに携わる側医の責任は重大である。内藤家には側医が本役と見習いを含めて複数いるが、とりわけ少年期の政順の健康管理に尽くした者として、三井正益雅親、喜多尚永秀喬、池田敬斎恭を指摘しておこう。

三井正益雅親は、亀之進の誕生から幼・少年期にかけて健康管理に尽力した側医である^②。かつては上々様、すなわち正韶に側医として御仕えしたベテラン医師である。「殿様御誕生之砌御病用出精」とあるように、亀之進が誕生した時から文化四年四月八日までの間、病気の折は熱心に治療に尽くしたり、さらには亀之進が同三年九月に出府する際には御供するなど、格別によく御仕えしたので、褒美として榎十俵を毎年支給されることとなる。

喜多尚永秀喬は、亀之進の命を救った医者である^③。秀喬が亀之進

に任せ始めたのは文化三年十月二十七日で、「亀之進様御用掛」となった。同六年二月十五日に、亀之進が痲瘡を患った折の辛労により褒美として紋付の小袖を一領拝領している。秀喬が褒章された時期から推測すると、亀之進が痲瘡に罹患した時期は同五年末から同六年の一月頃までの間であろう。したがって、亀之進が痲瘡に罹患した年齢は十一歳、もしくは十二歳と推定できるのである。少年藩主が痲瘡に罹患した事は、内藤家と藩にとって深刻な事態であった。ゆえに看病に尽くして全快に導いた秀喬は、内藤家と藩の危機を回避させた功労者といえる。秀喬は文化十一年十月十六日に、政順が江戸に出府する際に御用懸を命じられたもののこの勤めを辞退しているが、これまでの尽力を称えられて褒美金を拝領している。なお、文政六年に嫡孫銀藏への医業相続願いを出している。銀藏とは後の尚格のことで、政順亡き後に夫人の繁子、改め充真院に信頼を寄せられた医師である(次稿に詳述する)。しかし、この引退願いはすぐには認められなかった。政順が尚永をまだ側医として身近に置いておきたかったからであろう。尚格への家督相続は、同九年十月三日によろやく認められた。尚永は同十二年八月二十五日に病死している。

池田敬斎恭は、政順と夫人共に仕えている^④。寛政四年十二月二十三日に側医の見習となり、同十二年七月三日に側医本役を勤めていた。文化三年十月九日から、亀之進の御用掛を命じられる。亀之進は同月十三日に江戸に到着するので、亀之進の江戸での生活を支え

一人として御用掛に任命されたのである。さらに、敬斎は同十二年四月二十八日に、亀之進が婚礼を挙げる予定の充姫の御附に先立って任命されている。婚礼は同六月なので準備に携るためであろう。なお、敬斎の後嗣銀象時武も後に側医として政順に仕える(後述)。

その他、政順が幼年期の頃に側医だった者としては、新妻文冲胤翼、山田雲元勝房、嶋田道育仁寿、佐久間賜平錫、生田栄斉矩路などがいた⁵⁾。前述した三名のような亀之進の御用掛ではないが、複数からなる側医の一人として裏方として間接的な貢献があったかもしれない。

次に御相手を勤めた藩士を見てみよう。御相手とは藩主候補者もしくは少年藩主のいわば御学友のことである。藩士の子息の中から藩主候補者もしくは少年藩主と同世代の者が選ばれる。したがって、御相手に任命されるのは家督相続前の者であり、由緒書類ではその父の履歴の箇所に通称で記載されている。父の履歴の箇所に記載されていることから、子息が藩主候補者の御相手に抜擢されたことはその家にとってたいへん名誉な事なのである。政順の御相手としては、今村岩次郎と北村俊次郎、川名四郎次郎、高嶋直次郎貞慎などがいた。

まず、今村岩次郎についてふれておこう⁶⁾。岩次郎は前述の今村家とは別家の出である。今村岩次郎は岩村弥八郎知訓の息子である。父知訓は寛政三年(一七九一)九月二十日に大殿様(政脩)の御近習役、同七年(一七九五)十一月八日に延岡御近習役を勤めた人物

である。知訓が延岡御近習役に在職中であつた文化二年(一八〇五)二月三日に、息子の岩次郎が亀之進の御書物御相手に任命された。この時、亀之進は八歳である。亀之進の学問の仲間として選ばれたということとは、岩次郎が優れた知力と良好な性格の子供だったからであろう。なお、この翌年に亀之進は藩主になる。

同三年(一八〇六)九月に亀之進が急遽、江戸に出府することとなり、それに伴い岩次郎は八月二十三日に御供を命じられ、亀之進と共に九月五日に延岡を発ち、十月十三日に江戸屋敷に到着した⁷⁾。

出発に先立つ九月一日に、岩次郎はこれ迄の勤めを認められて褒美を貰い、さらに同年十一月には出府の御供を無事に果たした任でも褒美を授与された。岩次郎は同五年五月二十一日に日頃の貞実な勤めぶりを称えられ御取次見習となる。二日後の同月二十三日には自ら本役並に詰番を勤めたいと願い出て、了承されている。実に忠義な人物なのである。岩次郎は同六年五月九日に御取次本役になったが、同七年(一八一〇)二月二十八日に病死してしまった。

まだ若すぎる死であつた。父知訓にしてみれば大切な跡継ぎであり、そのうえ藩主の御相手に抜擢された優秀な息子の死去であり、無念極まりなかつたことだろう。亀之進にとっては少年の頃、藩主になる為に延岡から江戸屋敷に移動するという人生における大きな転機に直面した際に身近にいた一人が岩次郎であつた。しかも、貞実な人柄であつた岩次郎は、将来においても亀之進を支える人材として囑望されていたと思われる。実に早世が惜しまれる人物であつ

たといえよう。

北村武兵次勝猶の次男俊次郎も御相手を勤めた。文化二年三月十七日に亀之進の御相手に採用され、同三年八月二十四日に亀之助の江戸出府に同行することとなり御供をする。俊次郎の兄の官兵衛が病死した為、同年九月十六日から俊次郎は北村家の後嗣となるが、同年十二月十二日に御相手勤めを免じられ、同四年正月二十八日から本厓方に同道出席した。俊次郎は亀之進の痲瘡治療や婚礼後にも祝儀を貰っており、亀之進との関わりの深さが窺がわれる。なお、俊次郎とは後の俊治勝澄のことである。

川名四郎次郎は文化三年九月二十三日から亀之進の御相手となる。この四郎次郎とは川名四郎次郎庸貞の息子である。当時、庸貞は大目付を勤めていた。息子の四郎次郎は御相手となった後、同五年閏六月十六日には御側となるが、同十三年八月二十七日に病死してしまつた。四郎次郎は、亀之進が九歳から十九歳までの間、身近で共に過ごした配下であった。四郎次郎の早世は、政順にとって辛い別れであったことが想像できる。

高嶋直次郎貞慎は亀之進の御相手に文化三年九月二十三日に命じられた。順調に勤め、同九年十一月十日に御側勤となる。直次郎貞慎は、高嶋求馬貞良の息子である。父求馬貞良は、政順の実父である政韶の側勤を寛政三年二月十七日から勤め、享和二年八月七日から若殿様——すなわち政和——の給仕、同年十月十八日から御側勤を命じられている。父子共に当代の藩主の身近に仕えたのである。

右に指摘した御相手は、政順にとっては藩主と藩士の子息という立場の違いがあつても、共に学び遊びながら成長した、極めて親しい存在であつた。

この他に、政順の武芸の御相手に命じられた小野三郎兵衛恒貞をあげておこう。恒貞は文化七年八月二十三日から、政順が延岡に滞在する際の「劔術御相手」を命じられた。なお、江戸の「劔術御相手」は藤田李之助であつた。恒貞はその後、家中の劔術指南としても活躍したが、天保五年五月二十日に病死した。その死は政順が死去する三ヶ月前のことであつた。

恒貞の養父である満幹も劔術に優れており、文化二年九月三日から亀之進に劔術を指導していた。満幹にとって亀之進への指南は、藩士としての最後の勤めであつた。老年の武芸者なのであろう。亀之進に対して満幹は熱心に指導したようで、同年十一月九日にその尽力により三人扶持を宛がわれ、さらに同三年九月一日に褒美を貰い、同四年二月十四日には養子恒貞への家督相続に際して、これまでの指南を認められて祝儀を授与された。満幹と恒貞親子は二代に亘り政順に劔術を以って仕えたのである。なお、恒貞の息子である貞治満全も、祖父や父と同様に劔術の腕に優れ、藩主政義の代に活躍している。

さて、藩主の身近に勤めた藩主のうち、御近習役、御側掛、御用掛、御側勤めなどを勤めた藩士を見てみよう。ここでは齊藤英次郎、金沢武兵衛方教、猪狩志津馬勝楢、忍半五郎清胤、岡村新太郎武寛、

新妻榮七胤増、伊藤兵次郎正美、神山丹治長孝、山下多右衛門鄰朝、末永多門信寛、鈴木太郎寿昌、沢野長兵衛貞則などについて簡単にふれよう。

齊藤英次郎は齊藤伊平太知義の息子である。亀之進が藩主になる以前から御側仕えをしていた。文化三年十二月十一日に引き続き当殿様——亀之進——の櫛役と御側の方をこれまで通り勤めるよう命じられた。英次郎は同九年十一月十日から御納戸役を側役と兼帯して勤めることとなった。⁽¹³⁾

金沢武兵衛方教は、文化三年九月二十一日に亀之進の御用掛を命じられ、同十二月二十五日に御側掛となる。なお、後に方教の孫である方嘉は、充真院が光明寺に政順の五周忌に参拝した際に、御用人として旅の責任者の立場で同行した。⁽¹⁴⁾

猪狩志津馬勝栓は、寛政十年三月三日から芳林院様の重役仮役を勤め、後に本役になるが、文化三年九月二十三日から亀之進の御近習役となり、後に婚礼御用掛を勤める。⁽¹⁵⁾

忍半五郎清胤は、文化三年十二月十一日から引き続き御近習を勤め、同四年十二月十五日から御用職、同六年九月二十一日から御側掛、後に政順の御婚礼御用掛を勤め、褒美を授与された。政順を公私に亘り支えた藩士である。⁽¹⁶⁾

岡村新太郎武寛は文化三年九月二十三日から亀之進の御近習役を命じられた。⁽¹⁷⁾ 新妻榮七胤増は文化三年十二月十一日に側雇を命じられた。⁽¹⁸⁾

伊藤兵次郎正美は、文化四年十月二十五日から御側勤めを命じられた。その息子の伊藤鉄太郎秀璉も御側勤めとなり、文政元年六月十二日から同三年三月十四日まで勤めた。秀璉は政順が死去した折に光明寺への葬送の御供をした。その後も次代藩主政義の側勤めをするなど、親子で二代に亘り藩主に仕えた。⁽¹⁹⁾

神山丹治長孝は、文化五年三月二十五日に御近習役、同八年十二月十四日に御用掛、同九年正月二十五日に御側掛、同十一年三月二十八日に側掛を勤める。後に政順が叙爵した際に、叙爵用掛を担った（叙爵用掛については次稿でふれる）。⁽²⁰⁾

山下多右衛門鄰朝は文化五年二月十五日に御側格になった。⁽²¹⁾ 末永多門信寛は文化七年六月十五日に御近習役に命じられた。後にその息子である伊三郎が御側勤を命じられている。⁽²²⁾ 鈴木太郎寿昌は、文化八年八月十六日御近習仮役、同年十月十四日に御近習役となる。なお、寿昌の母が同年閏二月二十八日に御用長屋老女の方にお雇いとなり、その手当は老女並であった。寿昌は後に政順の袖直しと前髪執りの儀式で理髪を勤めた（次稿に詳述する）。⁽²³⁾ 沢野長兵衛貞則は文化十年七月十五日に御側勤めとなる。後に御内用筋と奥様御用などを勤めた。⁽²⁴⁾

さて、亀之進の身の回りの世話をする職務として御給仕役や御櫛役、御坊主、御小僧などを勤めた藩士について見てみよう。これは杉山嘉兵衛知久、小泉縫治正保、山田才次英皓、直井熊八成次、三松文七久通、長坂藤馬定候、石川郷助茂道、山田大七種房、松川調

吉などである。

杉山嘉兵衛知久は、文化三年八月二十五日に御櫛役と御膳番、御使者、御奏者献勤を命じられた。これらの勤めは亀之進が同年九月に出府するに際して任命された。知久は江戸から延岡に戻り、旅の御供をしながらこれらの職務を果たした。知久は右の職務の前は、同二年七月二十一日に大殿様小座敷御用達を命じられており、旅の後には同七年七月十一日に大殿様御内用を命じられた。亀之進への勤めは一時的であり、再び大殿様に関する仕事に戻ったのである。²⁵⁾

小泉縫治正保は、文化三年九月二十三日より御給仕役、同年十二月十八日から御側勤めとなる。実は正保は先代の亀之進——政和——の御相手を寛政四年七月一日から勤めていたが、同九年三月二十日に不埒で逼塞、同四年十七日に御用捨となり、御相手から退けられていた。失敗があったものの、次代の亀之進——政順——への勤めとして返り咲いたのである。正保はその後、文化十一年三月二十三日に重病となり跡継ぎが無かったので、佐倉藩士伊部清兵衛の弟——後の小泉矢三郎氏熙——を養子として迎えた。なお、養子の氏熙も後に藩主の奥様御用と藩主の御側勤を命じられ、藩主夫妻の身近に仕えた。²⁶⁾

山田才次英皓も文化三年九月二十三日に亀之進の御給仕役となる。同年十二月十一日に御側役となり、同六年正月十四日には御側役雇を命じられるが、同年三月三日に免じられている。²⁷⁾

直井熊八成次は文化三年九月二十三日から亀之進の御櫛役と御給

仕兼勤となり、同年十二月九日に政順が藩主に就任すると、その二日後の十一日からは政順の御側勤に打ち込むよう命じられている。なお、その兄である直井三右衛門成春は寛政十二年三月一日から同年九月二十七日まで亀之進（これは政和のことであろう。当時、政順は幼児ゆえ）の御近習役を勤めている。²⁸⁾

三松文七久通は、文化三年十月九日に亀之進の御給仕役御雇に命じられ、同十二月十一日まで勤めた。その後、久通は文政五年八月一日に文武寮頭取役となり、政順が死去した後、天保六年正月二十三日に遺物として御紋付横麻御上下を拝領している。²⁹⁾

右の久通と同日に亀之進の御給仕役に命じられた藩士に長坂藤馬定候がいる。定候は亀之進の御給仕役を勤めた後、文政十一年三月十五日から御側御雇となる。政順が死去した後の天保六年正月二十三日には、政順の形見分けを拝領した。³⁰⁾ 石川郷助茂道も文化三年十月九日に亀之進の御給仕役を命じられ、茂道は御給仕役を同年十二月七日まで勤めた。³¹⁾

御坊主としては、山田大七種房が文化三年八月二十四日に亀之進が出府する際に、御坊主として雇われて、旅の御供を勤めた。なお、若年者で雑用を担う役目として御小僧がある。松川祐助喜明の倅調吉が文化三年九月二十三日に亀之進の御小僧となっている。³²⁾

裏方として藩主の生活を支える職務としては、藩主が使用する衣類や道具などを整える御納戸役や道具類の収納・管理などを担当する御土蔵方付御役がある。御納戸役として、磯貝波衛祐之、石井忠

次治嘉、渡辺平太郎綱元から見てもよい。

磯貝波衛祐之は文化三年八月二十三日から同年十二月九日まで亀之進の御納戸役を勤めた。つまり、亀之進の出府が決まり随行員などが発令された日に、御納戸役となっているので、これから江戸において亀之進が藩主として新生活を始める為に必要な衣料や調度品などの準備に携ったと思われる。⁽³⁴⁾

石井忠次治嘉は文化三年九月二十三日に亀之進の御納戸役となり、同年十一月十一日に改めて御納戸役に命じられた。しかし、同四年十月十一日に病死した。⁽³⁵⁾

渡辺平太郎綱元は文化三年十二月十一日から続けて当殿——政順——の御納戸役を勤める。前職は寛政五年十二月二十八日に政順の実父である政韶の側勤、同十二年二月一日に亀之進(政和)の御納戸役を命じられている。綱元は後に奥様付の御納戸役になり、政順夫人に仕え続ける(後述)。政順が没した際には葬礼の御供をした。⁽³⁶⁾

御土蔵方付御役としては、嶋寛兵衛苗久と大竹藤治種知、松本清右衛門庸行らがいる。嶋寛兵衛苗久は文化三年六月一日に亀之進様御附御土蔵方となり、同年十二月十八日まで勤めた。その間、亀之進が出府する際に御供も勤めている。苗久は同七年九月二十七日に病死した。⁽³⁷⁾

大竹藤治種知は文化元年十月九日から亀之進の御附御土蔵方役となり、同三年八月二十五日に亀之進の出府の御供を命じられた。松

本清右衛門庸行は、文化二年七月十日に亀之進の御土蔵方付御役となった。⁽³⁸⁾

- (1) 松本治左衛門常水については「新由緒書」十四巻に記載がある。
- (2) 三井正益雅親については、「新由緒書」十一巻と「下土以上由緒書」十巻に記載がある。
- (3) 喜多尚永秀喬については、「新由緒書」十一巻と「下土以上由緒書」十巻に記載がある。
- (4) 池田敬齊恭については、「新由緒書」一巻と「下土以上由緒書」一巻に記載がある。
- (5) 新妻文冲胤翼は、先代の政和が藩主であった文化二年十二月二十七日に側医本勤になり、同三年八月二十四日に亀之進が出府する際の御供を命じられ、同十二月二十八日に船中における療養に尽力した功績により褒美金を授与された(「新由緒書」二巻、「下土以上由緒書」二巻)。山田雲元勝房は、寛政九年五月九日側医見習いになり、文化四年三月二十一日から側医本勤、文政四年六月二十五日から側医となった。しかし、同六年七月二十三日に病死している(「新由緒書」八巻、「下土以上由緒書」七巻)。嶋田道育仁寿は文化四年三月二十一日に側医本勤となる。しかし同年十一月二十六日から芳林院様の御付となった。なお、側医の見習いは寛政十一年十月十五日から勤めていた(「新由緒書」十一巻、「下土以上由緒書」十巻)。佐久間賜平錫は文化四年二月十四日から側医見習い、文政五年三月六日から同本勤となる(「新由緒書」十巻、「下土以上由緒書」九巻)。生、田栄齊矩路は文化元年四月二十五日に側医(見習いか)となる。文化十四年十二月二十五日に側医本勤となっている(「新由緒書」十一巻、「下土以上由緒書」十巻)。
- (6) 今村岩次郎の履歴は、「新由緒書」一巻と「下土以上由緒書」一巻に、父である岩村弥八郎知訓の履歴の箇所に記述がある。
- (7) 亀之進の旅の期間が九月五日から十月十三日であったことについて

- は、今村岩次郎の他に新妻文冲胤翼、嶋寛兵衛苗久、関源石衛門定盛、杉山嘉兵衛知久などの履歴の箇所記述されている。新妻については「新由緒書」二卷や「下士以上由緒書」二卷、嶋は「新由緒書」十一卷や「下士以上由緒書」十卷、関は「新由緒書」十二卷と「下士以上由緒書」十一卷、杉山は「新由緒書」十三卷と「下士以上由緒書」十一卷である。
- (8) 北村俊次郎については、その父である北村武兵次勝猶の記載がある。「新由緒書」十一卷と「下士以上由緒書」十卷にある。
- (9) 川名四郎次郎については、「新由緒書」四卷と「下士以上由緒書」四卷の父、川名四郎次郎庸貞の箇所に記載がある。
- (10) 高嶋直次郎貞慎とその父高嶋求馬貞良については、「新由緒書」五卷と「下士以上由緒書」五卷に記載がある。
- (11) 小野三郎兵衛恒貞と、後述する養父の万右衛門満幹と息子の貞治満全の三名については、「新由緒書」三卷と「下士以上由緒書」三卷に記載がある。
- (12) 藤田奎之助とは奎之介宗運のことで、当初は元七宗武と称している。「新由緒書」九卷と「下士以上由緒書」八卷に記載がある。
- (13) 斉藤英次郎については「新由緒書」十卷と「下士以上由緒書」九卷の父である斉藤伊平太知義の箇所に記述がある。
- (14) 金沢武兵衛方教については「新由緒書」四卷と「下士以上由緒書」四卷に記述がある。方教の孫方嘉については、拙稿「日向国延岡藩内藤充貞院の鎌倉旅行——光明寺廟所参拝と名所めぐり——」の四一、四二頁でふれた。
- (15) 猪狩志津馬勝栓については、「新由緒書」一巻と「下士以上由緒書」一巻に記述がある。
- (16) 忍半五郎清胤については「新由緒書」三巻と「下士以上由緒書」三巻に記述がある。
- (17) 岡村新太郎武寛については「新由緒書」三巻と「下士以上由緒書」三巻に記述がある。
- (18) 新妻榮七胤増については「新由緒書」二巻と「下士以上由緒書」二巻に記述がある。
- (19) 伊藤兵次郎正美と息子の鉄太郎秀理については、「新由緒書」一巻と「下士以上由緒書」一巻に記述がある。
- (20) 神山丹治長孝については、「新由緒書」四巻と「下士以上由緒書」四巻に記述がある。
- (21) 山下多右衛門鄰朝については、「新由緒書」八巻と「下士以上由緒書」七巻に記述がある。
- (22) 末永多門信寛とその倅である伊三郎については、「新由緒書」十三巻と「下士以上由緒書」十一巻に記述がある。
- (23) 鈴木太郎寿昌と母については、「新由緒書」十三巻と「下士以上由緒書」十一巻に記述がある。
- (24) 沢野長兵衛貞則については、「新由緒書」十巻と「下士以上由緒書」九巻に記述がある。
- (25) 杉山嘉兵衛知久については、「新由緒書」十三巻と「下士以上由緒書」十一巻に記述がある。
- (26) 小泉縫治正保と養子の矢三郎氏熙については、「新由緒書」九巻と「下士以上由緒書」八巻に記述がある。
- (27) 山田才次英皓については「新由緒書」八巻に記述がある。
- (28) 直井熊八成次とその父である三右衛門成春については、「新由緒書」六巻と「下士以上由緒書」五巻に記述がある。
- (29) 三松文七久通については「新由緒書」十一巻と「下士以上由緒書」十巻に記述がある。
- (30) 長坂藤馬定候については、「新由緒書」六巻と「下士以上由緒書」五巻に記述がある。定候が政順の形見を与えられた事については、當時家督を相続していた息子の良造忠昭の履歴の箇所に記載されている。
- (31) 石川郷助茂道については、「新由緒書」一巻に記述がある。
- (32) 山田大七種房については、「新由緒書」八巻に記述がある。
- (33) 松川調吉については、その父である松川祐助喜明について記した「新由緒書」八巻と「下士以上由緒書」七巻に記述がある。
- (34) 磯貝波衛祐之については「新由緒書」一巻と「下士以上由緒書」一

- 卷に記述がある。
- (35) 石井忠次治嘉については「新由緒書」一巻と「下士以上由緒書」一巻に記述がある。
- (36) 渡辺平太郎綱元については、「新由緒書」四巻と「下士以上由緒書」四巻に記述がある。
- (37) 嶋寛兵衛苗久については、「新由緒書」十一巻と「下士以上由緒書」十巻に記述がある。
- (38) 大竹藤治種知については「新由緒書」三巻と「下士以上由緒書」三巻、松本清右衛門庸行は「新由緒書」八巻に記述がある。

（次号に続く）

《Summary》

Some Clansmen who supported the Masayori Naitos,
the Lord of the Nobeoka Domain in Hyuga Province (1)

By Naomi KANZAKI

Among many vassals who served Nobeoka feudal lord in Hyuga Province, Masayori Naito and his wife, who was later to become Jushin-in, this study attempts to reveal who mainly supported their private life including those who acted as companion for Masayori in his childhood, who served as a personal physician, who were involved in the coming-of-age ceremony and their wedding, and who served the wife. First, I introduce the vassals who had deep relationship with Masayori, the Imamura and Ito families. Then, dividing Masayori's life into four stages: childhood/boyhood, adolescence, later years, and after death, I identify who had relationship with him or his wife in each stage, what were their duties, and how long they served. In this article, I especially wrote on the vassals who had deep relationship with Masayori and those who served in his childhood/boyhood.